

ピカイア

作／小松杏里

【登場人物】 ※登場順 [出演者の数により数役演じる]

男

喪服を着た人々 [男2・女3]

老人

若い女

ヤクザ風の男

男女の聾啞者カップル

妊婦

金持ちそうなオバサン

課長

OL

手かざしの女

ニューハーフ

脅えた女

中年の男

宇宙人

大家族 [父・母・子供たち・祖父・祖母]

ストリーキングの男

署名運動の女

変わった歩き方の男

試供品配りの女

ハンドル男

婦人警官

女優

マネージャー

カメラマン

モデル

アンケート青年

女子高生1・2

天使

悪魔

外国の女

教授
助手の女
エイズの若者
演歌歌手
桃太郎
コスプレ男
幽霊
ボクサー
トレーナー
少女
刑事
犯人
ゴミ捨てオバサン
男同士のカップ A・B
行商オバサン
バスガイド
教師
小学生たち「男の子2・女の子3」
ウェディングドレスの女
新興宗教の教祖
弟子たち
ロープを引きずった男
パントマイムの女
牧師
チンピラ
ほろ酔いサラリーマン
主婦 A・B
ホームレス
新たに来た男

客入れ

開演 20 分前、次々と客が入場してくる。

客入れ時の BGM として流れているのは、ビートルズの〈アビー・ロード〉である。

客入れが終了すると、どこからか微かに風の音が聞こえてくる。

客入れの音楽が F・O し、客電も消えてゆく――

1

微風。

そこは、一本の道である。

道の中央よりやや下手寄りには、道の一方「上手」を指し示す真っ白い矢印の看板が立っている。

道の下手側から、50 代前半と思われるひとりの男が現れる。

男は、どこにでもいるような、長袖のシャツとズボンというごく普通の格好をしている。

男は、矢印の看板の指し示す方向「上手側」に向かってゆっくり歩いてくるが、看板を通り過ぎると、ふと考え事をするかのように立ち止まる。

そして、看板の前に進み出ると、意を決したように、矢印の指し示す向きをまったく逆に変えてしまう。

看板の向きを変えた男は満足したように微笑み、少し離れた横「上手側」に腰を下ろす。

男は、足を抱えて座り込み、道の左右を見ている。

いつのまにか、風が、ほとんど感じられないほどに静かになっている。

2

〈バッハの無伴奏チェロ組曲第 5 番〉が流れてくる中、男が現れたのと逆の方向から、すなわち道の上手側から、喪服を着た人々「男 2・女 3」がゆっくり

と現れる。

※以下、特別な指示がない限り、人々は同じ方向「上手側」から登場する。
人々は、悲しみを胸に秘め、互いになぐさめ合いながら、静かに、そして、しっかりと大地を踏み締めながら、歩いてゆく。
座っている男の前も、何事もなく通り過ぎる。
人々がその道から去ろうとする頃に、男は何かに気づいたのか、人々に何かいわなければいけないと思ったのか、すっと立ち上がり、去りゆく人々を哀しそうな表情で見送る。

#3

朝らしい爽やかな音楽。

犬の散歩をしている老人が現れる。

ところが、首輪と紐だけがあつて、犬は見えない。

老人は、見えない犬に声をかけている。

老人 ……こら、だめだよ、そっちに行っちゃ。

その様子を見守っていた男は、意を決して老人に声をかける。

男 あの……

老人 はい。

男 もしかして、それ……犬ですか？

老人 ええ。

男 まさか、犬が居ぬ、なんていうシャレじゃ……

老人 ハハハハ、おもしろいことをいう人ですなあ。

男 しかし……

老人 五年前にカミさんが亡くなりましたね。それ以来、私はこいつと二人暮らしなんですよ。

男 ……そうですか。

老人 ワルキューレっていうんです。

男 え。

老人 こいつの名前ですよ。

男 ワルキューレ。

老人 ええ。そうだ、ちょっと呼んでやってみてくれませんか。

男 え、でも……

男は何かを気にしているかのように、辺りを見回す。

老人 ……どうしました？

男 いや、どつきりカメラかなんかで、私が声をかけると……

老人 え。

男 いえ、わかりました。呼びますよ……ワルキューレでしたね？

老人 ええ。喜ぶと思いますよ。

男 ……ワルキューレ！

男は、意を決して、見えない犬に向かって名前を呼ぶ。

すると、見えないはずの犬から、喜んで吠え返す犬の声が聞こえてくる。

男 (驚いて) え。

老人 ……(男に) ありがとう。さ、行こうか、ワルキューレ。

老人は男に会釈をすると、見えない犬を連れて去ってゆく。

老人と見えない犬を見送り、声をかける男。

男 いつまでもお元気で！ ワルキューレもな！

4

軽快な音楽に乗って、若い女が現れる。

女は、派手な服装で厚底のサンダルを履き、ガングロで髪にはメッシュが入り、首から携帯電話を下げ、網のバッグを持っている。

いわゆる渋谷系ギャルである。

男は、興味深げに女に近づいてゆく。

女の肩にブラジャーの紐が見えていることに気づき、声をかける男。

男 ……ちよ、ちよっと、それって、ブラジャーの紐じゃないの？ 見えてるよ。

若い女 (かわいらしく) いいのよ、見せてんだから。

男 見せてるって、見せてどうするの？

若い女 (笑いながら) 決まってんじやん。

男 (考えて) ……つまり、フケってことか。

若い女 いやねえ、あたはまだ16よお。

男 16？ ま、それはいいとして、だから、その、老けてるっていうんじやなくて、フケが出てるって——

若い女 失礼ね！ ちゃんと洗ってるわよ、髪の毛。出るわけないじやん、フケなんて。

ブンブン！

男 ごめん、ごめん。つまり、その、フケっていうのは、競馬で牝馬が、つまり、メスの馬が発情することです……

若い女 ……

男 だから、ナンパされるの、待ってるんだろ？

若い女 (ニヤツとして) わかってんじやん。おじさんなら、まあ、まだ守備範囲だからいいかなあ ……

男 ホント？

そこに、約束の時間に遅れそうなサラリーマンが、何もいわずに全力疾走で走り過ぎてゆく。

その時、男はうまく避けるが、若い女はサラリーマンにぶつかかり、転んでしまふ。

若い女 キャッ！ (怒って豹変して立ち上がりながら叫ぶ) てめえ、どこに目ん玉つけとんじやい！

男は、若い女を心配して駆け寄ろうとするが、その剣幕に驚いて、やめる。

若い女 ったく、ふざけやがって！ 今度、見つけたら、喉から手突っ込んで、奥歯ガタガタイわせたるでえ！ ちくしょう！

若い女は、ブツブツいいながら去ってゆく。

男は、啞然として若い女の立ち去るのを見送る。

男 やっぱり、ヤマンバだな……

#5

音楽。

男が、ふと誰かが来る気配を察して振り向くと、いかにもそのスジといった服装のヤクザ風の男がやってくる。

男は何げなく避けようとするが、ヤクザが、男の近くで立ち止まり、煙草を取り出す。

ヤクザは火を点けようとライターを探すが、どうやら無いらしく、男に、火を貸してくれというような動きをする。

男は、ひきつった笑顔を浮かべながら、自分は煙草を吸わない、というジェスチャーをし、「ごめんなさい！」と土下座する。

ヤクザは、仕方ないといった感じで煙草をしまい、男をひと睨みし、背を向ける。

そこに、仲の良さそうな聾啞者のカップルが、手話で話をしながら現れる。

聾啞者女 「今度、いつ逢える？」

聾啞者男 「来週の日曜日かな。」

聾啞者女 「来週まで逢えないなんて、寂しいな。」

聾啞者男 「ごめん。仕事が忙しいんだ。」

男は、ヤクザがいることを教えようと二人に近づくが、二人はなかなかかわからない。

男 (大きな声で) だから、そこにヤク——

と、ヤクザが気がつき、振り向いて三人を見る。

聾啞者の二人も、臆することなくヤクザと対面する。

男 (間に入ってヤクザに) あ、あの、この人たちは口と耳が不自由で……ごめんなさ

い！ (また、土下座する)

と、突然、ヤクザが手話で聾啞者に話しかける。

ヤクザ 「あなたたちは、障害者の方ですか？」

聾啞者男 「うなづく」

ヤクザ 「私は健聴ですが、手話を勉強しています。」

聾啞者女 「男と顔を見合わせ、ヤクザに「それはいいことですね。」

ヤクザ 「私の手話はどうでしょうか？」

聾啞者男 「笑って」大丈夫。よくわかりますよ。」

ヤクザ 「ありがとう。これからもがんばります。」

聾啞者女 「しっかり勉強して下さいね。」

ヤクザ 「はい。あなたたちも、いつまでも仲良く、お幸せに。」

二人、うなづく。

聾啞者男 「ヤクザに「さようなら。」

ヤクザ 「さようなら。」

聾啞者のカップルは仲良く立ち去る。

二人を見送ったヤクザ、成り行きを呆然と見ていた男の方を振り返る。

ヤクザ （ニヤツとして）確かに、煙草は身体によくねえよな。

煙草を取り出し、握りつぶして、ゆっくりと去ってゆく。

男 ま、いろいろあるよな……

6

音楽。

「うくん、うくん」と唸りながら、妊婦がフラフラとやってくる。

男が様子を見てみると、急に産気づいたかのように、大きな声を上げて、その場に座り込んでしまっ。

駆け寄る男。

男 大丈夫ですか？

妊婦 う、生まれる！ 生まれる！

男 そ、そんな、生まれるったって、こんな何も無いところで、困っちゃうなあ……

妊婦 すみません、さすって下さい、お腹。

男 え、あ、はい。お腹ですね。(さすって)「ここ」辺ですか？

妊婦 もう少し、下の方……うっ！

男 あ、出さないで下さいよ。あ、いえ、こんなところで産み落とされても、何の処理も出来ませんから……困ったなあ……(さすりながら)「この辺りでいいですか？

妊婦 は、はい、そこです。ああ……

男 がんばって下さい！ あ、いえ、ここで生むのをがんばるんじゃなくて、我慢するのを、がんばって下さいよ！

男は、妊婦のお腹をさすり続けている。

妊婦は呼吸を整えている。

男 (突然) あっ、今、動きましたよ。私の手を、なんかこう押し戻すような感じがしました。

妊婦 きっと、蹴ったんですよ。よく動くんです。たぶん、男の子だと思えます。

男 ……(しみじみと)この中に、新しい生命が宿っているんですね。

妊婦 (落ち着いて) ああ、だいぶ良くなりました。なんとか持ちこたえそうです。

男 (ホッと)よかった……

妊婦 ありがとうございます。助かりました。(立ち上がる)

男 無理しないで下さい。

妊婦 大丈夫、波が治まりましたから。しばらくは落ち着いていられます。

男 ……臨月なんですね。

妊婦 はい、すでに予定日は過ぎてて。初産は遅れることが多いらしいんですけど……

男 心配いりませんよ。こうして自分の力で歩くことが出来るんだ。丈夫な赤ちゃんが生まれるに決まっていますよ。

妊婦 ありがとうございます。それじゃ……(男に会釈して去る)

男 (妊婦の後ろ姿に向かって) がんばって！

そこに、いかにも高そうで派手な服を着、光り物の装飾品をジャラジャラつけた金持ちそうなオバサンがやってくる。

男が眉をひそめて見ていると、オバサンは何か落ちているのを見つけたらしく、周りを気にする仕草をする。

男もそれに気づくが、知らないフリをする。

やがて、オバサンはサッとそれを拾い上げる。

それは、妊婦が落として行った財布である。

オバサンは、中身を見、ニヤツと笑ってしまい込んでしまう。

そして、足早に立ち去る。

男

(少し後を追い) この、ネコババばばあ！

8

音楽。

OLの女が走ってくる。

「待ってくれよ、石田君」と追いかけてきて止める中年の男、OLの上司の課長である。

男は、聞かないふりをしながらも、その様子を見守っている。

課長 ……とにかく、女房のことは何とかするから……

OL ……何とかする、何とかするって、もう、二年じゃないですか！

課長 しょうがないんだ、いろいろと……

OL (大きな声で) 課長さんは、しょうがないんだでいいかもしれないけど――

課長 (制して) おい、君！ 石田君、し、静かに……落ち着いて話そつ。

OL ……お子さんはどうするんですか？

課長 え。

OL あたし、この前の日曜日、課長さんちの近くまで行ったんですよ。

課長 石田君！ そういうことは、ルール違反じゃないか。

OL ルール違反？ あたしたちのしていることが、すでにルール違反なんじゃないですか？

課長 ……

○L 課長さん、お庭でお子さんたちと楽しそうに遊んでいた。お二人もいらっしやるんですね。

課長 話しただろう。

○L (首を横に振り) あたし、ひとりだけって思っていました。課長さんも確か、親や親戚から責められて、仕方なくひとり作ったって。決して愛情があったから出来たわけじゃないって、おっしゃってましたよね。

課長 ……愛情なんか、とっくにないさ。

○L でも、それでお二人目、出来ます？

課長 ……

○L 違うんですよ、ひとりと二人じゃ……

課長 子供は女房が引き取るだろう。いや、引き取らせるよ。君とはゼロからの出発になるが――

○L 冷たいんですね。

課長 え。

○L きつとあたしも、そんな風に捨てられるんだろうな。

課長 石田君……

○L 課長さん、ひとりの女の人も幸せに出来ない人が、他の人を幸せに出来ると思いません？

課長 ……

○L あたし、幸せになりたいんです……さようなら……(立ち去る)

課長 君、待ってくれ……(後を追う)

男、二人の去った方を見る。

男 どっちもどっちだと思うけど……やっぱり課長さん、あんたが悪いのかな。

9

雑踏音。

男の背後から、「あの、すみません」と女が声をかけてくる。

男が振り向くと、いかにも作り笑いという感じのニコニコした笑顔を浮かべた女が立っている。

女 あなたの健康と未来のために祈らせて下さい。

男 え。私、健康そうに見えませんか？

女 い、いえ、そんなことはありませんが……

男 それじゃ、祈らなくていいじゃないですか。

女 あ、そうでしたわね。それじゃ。(関わるのをやめようと、その場から逃げようとする)

男 お待ちなさいな。

女 え。

男 健康はともかく、未来のために占って下さいよ。

女 いえ、占うんじゃないくて、祈るんです。

男 そうでした、そうでした。さあ、どうぞ！ (女の前で目をつぶり、神妙な態度になる)

女 そうですかあ……それじゃ……

女は、男の顔の前に手をかざし、念じるような格好をする。
少しすると、男は片目を開ける。

男 ……聞こえませんか。

女 え。

男 あなたの祈ってる声、聞こえませんかよ。

女 いえ、声は出さないんです。

男 声出さないで祈るんですか？

女 はい。

男 それじゃ、祈られてる方はわからないじゃないですか！

女 (呆れて) あ、いえ、もう結構ですから…… (去ろうとする)

男 結構ですって、あなたが祈りたいっていったんですよ。

女 ちょっと違うようですか……

男 違いますよ。いいですか、祈るっていうのはね……そりやそりやそりやそりや……

男は、目をつぶり、変な呪文のような文句をいって祈り出す。

男が祈りに没頭している間に、女は逃げてしまう。

男が「カーッ！」と気合を入れて目を開けると、女はすでにいない。

男 あれ…… (自慢げに) 私の勝ちだな、祈りに関しては。

音楽。

妖しい雰囲気を感じ、男が振り向くと、派手なメイクの女、実はニューハーフ
「というよりドラアグクイン」がやってくる。

男 (喜んで) おおっ! (歩いてくるニューハーフに近づき) いやあ、お美しいです
ねえ……

ニューハーフ ありがとう、おじさん。

男 (男の声なので驚き) あ、いや、もしかして、あなた、男?

ニューハーフ やあねえ、そんないい方しないで。

男 やっぱり男なんだ。

ニューハーフ そうよ、まだ取ってないもん、フフフ。

男 取ってないって、何を?

ニューハーフ (低い声で) タマに決まってるんだろ!!

男 わ、わかりました。つまり、あなたはいわゆるニューハーフってわけですね。

ニューハーフ ていうよりい、ファイティング・ドラアグクインって呼んでちょうだい
な!

男 ファイティング・ドラアグクイン?

ニューハーフ、激しい動きをする。

ニューハーフ フフフ、おじさん、興味あったらあたしのお店(名刺を渡す)、来てちょう
だい。みんな、あたしみたいにカワイイ娘ばかりだから、ウフツ。

男 (名刺を見て) (シーメール天国・チャッピー)? どんな店なんですか?

ニューハーフ ニューハーフのソープよ、ウフフ。

男 ソ、ソープってことは……(想像しながら動きをして) なんか、ムチャクチャすこ
そうですわね……

ニューハーフ 男のツボがわかるのは、やっぱり、オ・ト・コよ! あたしを指名する時
は「ヒイちゃんお願いします」っていいね。いい、ヒイちゃんよ。

男 ヒ、ヒイちゃんですね。

ニューハーフ もう、ヒイヒイさせちゃうわよ、オホホホ。それじゃあ、バイビー!

ニューハーフ、男の頬にブチュッとキスをして楽しそうに去ってゆく。

男 (あわてて口紅の跡を拭きながら) まあ、一度ぐらい経験してみるのも悪くないかな……いや、ヒイチヤンだけはやめとこ。

1 1

後ろを気にしながら、何かに脅えたような若い女が現れる。
男も、後ろの方を気にして見る。

脅えた女 (男の陰に隠れ) ……います？

男 え。

脅えた女 追いかけてきてません？

男 (後ろの方を見て) ……さあ、誰もいないようですけど。

脅えた女 (ホッとして) よかった……いいえ、安心は出来ないわ。

男 ……どうしたんです？

脅えた女 ストーカーよ。

男 ストーカー？

脅えた女 つきまとわれてるのよ、ずっと。

男 あ、ああ。

脅えた女 どうしよう……

男 警察にはいったんですか？

脅えた女 だめよ。そんなことしたら、あいつ、何するかわからないわ！

男 ……あいつって、どんなやつかわかってるんですか？

脅えた女 いいえ、決して姿は見せないの。でも、毎日、決まった時間になるとあたしを

つけ始めるのよ。

男 何かされたんですか？

脅えた女 だから、ずっとついてくるのよ。ストーカーなの！

男 ……やはり、何かされてからじゃまずいと思うんで、警察に――

脅えた女 シッ！ 聞こえるでしょ、あいつの足音。

男は耳を澄ますが、何も聞こえない。

男 何も聞こえませんが……

脅えた女 (震えながら) あいつ、足音を立てないで歩けるようになったんだわ……

男 そんな……

脅えた女 お願ひ、ここにいて、あいつが来たらやつつけてちょうだい！

男 やつつけるっていったって、どんなやつかわからないじゃ……もし、人違いだっ

たらどうするんです？ それに、格闘技なんかやってるやつだったら……いやです

よ。やはり、警察に訴えた方が――

脅えた女 (男にすがり) お願ひ！ もう、限界なのよ、助けて！

男 ……私、暴力、好きじゃないし……

脅えた女 暴力じゃないわ、これは！ 正義よ！ 正義の制裁よ！

男 ……それは、ちよつと違うんじゃないかな……

脅えた女 とにかくお願ひ……頼んだわよ！ (後ろを気にしながら走り去ってゆく)

男 (女を少し追いかけ) あ、ちよつと待って下さいよ！

1 2

いつのまにか、男の背後に中年の男が忍び寄っている。

男 もう、しょうがない…… (振り向いて、中年の男に気づき、驚く) わっ！

男は、一瞬退くが、中年の男を上から下まで見て安心したかのように「よしっ！」「とつぶやき、中年の男に「コノヤロー！」と飛びかかってゆく。

だが、軽く腕をひねられ、押さえつけられてしまう。

男 イテテテテ……

中年の男 なんですか、いきなり？

男 は、離せ、ストーカー野郎！

中年の男 ストーカー？

男 あの子の後、つけてるんだろ？

中年の男 ……失礼ですが、彼女とはどういう関係で？

男 関係も何も、通りすがりに、ストーカーに追いかけてるから助けてくれていい
われただけさ！

中年の男 (一瞬考え、手を離しながら) それは申し訳ありませんでした。

男 フーツ……どうということなんだ？

中年の男 え。

男 つけてるんだろ、あの子のこと。

中年の男 まあ、確かに、尾行はしてましたが……

男 尾行？

中年の男 そうか、気づかれていたか……いや、ほんとに申し訳ありません。関係ないあなたに迷惑をかけてしまって……

男 あ。あんた、ひよつとして……探偵、さん？

中年の男 仕方ありませんね。実は、彼女の父親に依頼されて、彼女の素行調査をしてるんです。

男 素行調査？

中年の男 はい。

男 ……あの、父親が娘の素行調査を依頼することって、多いんですか？

中年の男 増えてますね、最近。

男 それって、娘を変な男に取られたくないっていう、やっぱり、父親としての思いが……

中年の男 (笑って) そんな単純なものじゃないですよ。結婚詐欺です。

男 結婚詐欺？

中年の男 財産のある娘に近づいて、金を親から引き出させる。本当に結婚するのならともかく、それだけが目当てのやつもいますから。金を引き出したらドロンとか、自分の借金を肩代わりさせるとか。

男 そんなこと出来るんですか？

中年の男 一人娘でお嬢さん育ちの女性は、免疫がありませんからね。ちよつと口のうまいやつに引 っ掛かると、イチコロですよ。

男 ……

中年の男 それじゃ、私はこれで。(行こうとする)

男 あの、防いであげて下さいね、結婚詐欺。

中年の男 (ニコツとして) はい。

男 でも、だますやつも悪いけど、だまされる方も、悪いんでしょうね。

中年の男 ……そりゃ、そうですね。勉強不足ですよ。そんなに甘いもんじゃありませんからね、世間は。

中年の男、男に軽く会釈をすると、立ち去る。

男 (中年の男に向かって) もう、スニーカーに間違われしないで下さいよ！

13

音楽。

辺りの様子が変わり、まぶしい光りに包まれる中、全身金色に光る服を着た女の宇宙人が現れる。

男は驚きながらも、ゆっくり近づいてゆく。

すると、あるところまで近づくと、跳ね飛ばされてしまう。

男 ちょ、ちょっと、あんた何すんだよ、っていっても、何もしてないように見えただど……

宇宙人 ジドウテキニ、ボウギヨソウチガハタライタノデス。

男 ぼ、防御装置って……

宇宙人 (男に向けて変な動きをする) ……リヨウカイ。アナタハ、キケンジンブツデワナイコトガ ワカリマシタ。

男 ……あんた、なんなの、いったい？

宇宙人 ワタシノナワ、オーソン。

男 オーソン？ オーソン、オーソンって……(指差して) そ、その格好、あ、あの、

まさか、アダムスキー博士が会ったという、き、金星人ですか？

宇宙人 ヨク、ゴゾンジデスネ。

男 私ね、こう見えてもUFOに関しちゃ、ちょっとうるさいんですよ。実際、私も伊

豆の山の中で何台もUFOに遭遇してますからね。

宇宙人 ……ソレハ、タイムトラベラーカモシレマセンネ。

男 タイムトラベラーって、『時をかける少女』の？

宇宙人 フルイデスネ。セメテ、『ターミネーター』トイイナサイ。

男 『ターミネーター』も、もう古いんじゃないかな。

宇宙人 イイデスカ。タイムトラベラート、ウチュウジントワ、チガイマス。タイムトラベラーワ、コノチキュウノミライジンノコトデス。トウゼン、シップノカタチモチガイマス。

男 ヒップって、お尻の形が違っんですか？

男、女の尻をじっと見て触ろうとするが、ブツという音がして跳ね飛ばされてしまう。

宇宙人 ボウギョソウチガハタラクイマシタ。

男 (鼻を押さえて) いいですね、それがあると痴漢にあわなくて。臭いもするし……

宇宙人 イイデスカ、ヒップデハアリマセン。シップ、ツマリ、ノリモノノコトデス。

男 あ、UFOのことね。

宇宙人 ……イケナイ、モウイカナクテワ。

男 あ、ちよっと、オーソンさん。で、あんた、ここに何しに来たわけ？

宇宙人 ソレワ……イマワイエマセン。ヒ・ミ・ツ。

男 ヒ・ミ・ツって、なんか重大なことと関係あるんじゃないでしょうね？

宇宙人 ミレニアム……

男 ミ、ミレ……ニ、アム？

宇宙人 アナタモイツカ、キンセイニイラシテクダサイ。

男 え、そりやもう、こんな私でよかったら、いつでも伺いますよ。

宇宙人の女、金星の挨拶をし、男も真似をする。

宇宙人の女、去ってゆく。

辺りの雰囲気は元に戻る。

ニヤニヤとしていた男が、ハツとしたような顔になる。

男 ……あれ、何やってたんだ、今まで……(考える)

14

音楽。

おじいちゃん、おばあちゃん、お父さん、お母さんと、子供たちの大家族が、まるでハイキングにでも行くかのように楽しそうに、賑やかに現れる。

男は、おじいちゃんやおばあちゃんに、「お元気そうですね」「長生きして下さいね」とか、子供たちに「しっかり食べて大きくなるんだよ」などと、声をかける。

世間話のような会話が続く。(と「」に行くのか、とは尋ねない)
みんなが去ってゆく中、お父さんが残る。

子供たちの声 お父さん、早く〜！

お父さん ああ。

男 いやあ、楽しそうな御家族で何よりですね。みんなでハイキングだなんて、うらや

ましいなあ……

お父さん (立ち止まり) 一家心中する場所を探してるんです。

音楽、ピタッと止む。

お父さん、男に会釈して去る。

男、黙って見送る。

15

華やかな音楽と共に、全裸の男(股間を手で押さえている)が走ってくる。

全裸の男は嬌声を上げながら、走り回る。

ストリーキングである。

男は、あわてて「ちよっとあぶないよ」といいながら、全裸の男を捕まえようとするが、全裸の男の逃げ足は早い。

全裸の男は、最後に堂々と『ターミネーター』の真似をして「I'll be back.」
と行って去ってゆく。

男 ストリーキング、いや、まさに、ストリート・キングだな……

16

そこに、若くてまじめそうな女が現れ、男に声をかける。

女は、署名運動の格好をしている。

女 すみません。

男 はい。

女 フランスの核実験継続に反対する、抗議の署名なんです、お願い出来ますでしょうか？

男 いいですよ。(書「ントス」で、「これ、どうするの?」
女 まとめて、シラク大統領に送ります。
男 あ、それじゃ、フランス語で書かなきゃだめだね。あれ、みんな、日本語じゃない。
女 シラク大統領で漢字読めるの?
男 いえ、別に漢字でも大丈夫だと思いますよ。これぐらいの反対署名があったんだと
女 いうことがわかればいいんですから。
男 あ、数がね、わかればね。
女 はい。
男 ……やだなあ。
女 え。
男 なんかそういうのって、十把一絡みみたいでさ。
女 え、でも、署名運動ってそういうものじゃないですか?
男 まあ、確かにね。でも、私は私で何らかの形で抗議をしたいなあ。フランス製品を
一切買わないっていう人もいるだろうし、フランス映画を見ないとかね……あ、フラ
ンスパン食べるのやめるって、どう?
女 い、いいと思いますけど……
男 だからさ、そういう風にいろんな抗議の仕方があるんだから、別に署名しなくたっ
ていいんだよね。
女 そうですけど……
男 署名運動がしたいあなたは署名運動をすればいいんだし、署名したい人はすればい
い。それを、すべて国民の義務だみたいな風潮になっちゃうとやばいよね。
女 ……まあ、確かに。で、あなたは何をするんですか?
男 私? うくん……よし、これから一切、フ・ラ・ン・スっていう言葉っていうか、
その文字を使わないようにしてみようかな。
女 フとラとんとスをですか?
男 そう。どう? 画期的な抗議の仕方だろ? ……(考えて)まだ、使ってないぞ。
女 ……なんかドキドキしますね。
男 あ、2回も使った! ントス。
女 (怒って)あたしは別に……せいぜい、がんばって下さいね。
女 女、半ば呆れたように立ち去る。

男 がんばりまあす! あ、もう2回も使っちゃった。だめだな、こりゃ。

音楽。

派手な格好をした男が、変わった歩き方をしながらやって来る。
変わった歩き方の男は、関わるのを避けようとしている男の前を通り過ぎると、
男の方を向き直り、声をかける。

変わった歩き方の男 ……あの、そちらの方！

男 は、はい。

変わった歩き方の男 どうです、一緒に歩いてみませんか？

男 は？

変わった歩き方の男 いや、こりゃ、どうも失礼、ぶしつけでしたな、ホホホホ。実は私
……(と近づいて) こういう者です。(と名刺を男に渡す)

男 (読んで) 《変わった歩き方協会専務理事・橋本ウォーカー悟》。ウォーカー？

変わった歩き方の男 ホホホ、うちの会員はみんなウォーカーですよ。(歌って) 私もウォ
ーカー、あなたもウォーカー、ウォーカー、ウォーカー！ どうです、あなたもお入
りになりませんか？

男 変わった歩き方協会、ですか？ でも、私、運動得意じゃないし、リズム感だって
あまりいいとは……

変わった歩き方の男 いいえ、運動とかリズム感とか、そんなの関係ありません。要は、
楽しむということです。いいですか、まず、初心者の方は、いつもと違う方向へ足を
出すことを(実際にやって教え)心掛けてみて下さい。(あらぬ方向を見ながら) いっ
もと違う世界が、必ずやあなたの前に開けることでしょう、ホホホホ。

男 ……あのう、どこ見て話してます？

変わった歩き方の男 (指差して) あなたを、見てますよ。さあ、やってみて下さい、あ
なたの利き足はどちらですかあ？

男 利き足？ 右足だと思えますけど……

変わった歩き方の男 ミギアシ〜！ さあ、どうぞ、まずは右足から！

男、「そうですね……」といいながら、歩いてみる。

すると、意外にも、とても変わった歩き方になっている。

変わった歩き方の男 いやあ、すばらしい、すばらしい！ (変わった歩き方で男に近づ

いてくる。すると男が止めるので）あ、続けて、続けて！

男は、調子にのって変わった歩き方を続ける。

男が歩いていると、変わった歩き方の男もついて来る。

変わった歩き方の男 ……どうです、楽しかったでしょ？ ぜひ、我が協会に入ってください。すぐにはいいません。気が向いたら私に電話して下さい、どうぞよろしく！ その、名刺のところに直接来て下さっても結構です。あなたなら、大歓迎しますよ。では。

変わった歩き方の男、変わった歩き方をしながら去ってゆく。

男 ……（名刺を見て）変わった歩き方協会、ねえ……（名刺をしまっ）

1 8

雑踏音。

何かの試供品が入った籠を下げた女が現れる。

道行く人に配ろうとしている気配を察し、男が近づいてゆく。

男 ……ひとつ、くれるかな？

試供品配りの女 すみません。これ、女性用なんです。

男 でも、試供品でしょ。いいじゃない、ひとつぐらい。

試供品配りの女 試供品だから、試してもらえる人じゃないと。

男 男だって使えるんじゃない。化粧水とかクリームとかでしょ。私、お肌きれいにしたいと思ってるんだ。

試供品配りの女 （男の顔を見て）そうですね。でも、これ……生理用品なんですよ。

男 生理用品？

試供品配りの女 新製品のナプキンなんです。

男 ……そうか。まあ、確かになんでも貰えばいいってもんじゃないね。

試供品配りの女 すみません。

男 ……それで、どうなの？

試供品配りの女 え。

男 新製品の使い心地は？

試供品配りの女 あ、いえ、私はまだ……

男 なんだ、宣伝してるのに使っていないの？

試供品配りの女 いえ、これは宣伝じゃなくて……

男 でも、配ってるじゃない。

試供品配りの女 ……バイトですから。

男 アルバイトだからって、自分が使ったこともないものに配るだなんて、ちょっと無責任じゃない。もし、それ使った人が、かぶれちゃったりとかしたらどうするの？

試供品配りの女 かぶれません！

男 わかんないじゃない、使っていないんだから。

試供品配りの女 ……もしそうだったら、会社が——

男 でも、あなたが配ったんでしょ。

試供品配りの女 ……わかりました。もう配りませんよ。

女は行こうとする。

男 あ、やっぱりひとつ貰えないかな。彼女にあげるんで……

女、一瞬立ち止まり、ムッと男を睨みつけて行ってしまふ。

男 ……やめよう、見栄張るのは。

19

音楽（ヘミザルー）と共に、ブルンブルンと、車のエンジン音を口真似でしながら、ハンドルを持った男が走り込んでくる。

ハンドル男は、ものすごいスピードで、声を出しながら、その道を行ったり来たりする。

男は、ぶつからないように、フラフラしながらも避けている。
と、ハンドル男がクラッシュしたかのように、スピードが遅くなって休む。

逃げ回っていた男が、ハアハアと息を整えているところに、交通課の婦人警官「ミニスカ・ポリスの格好をしている」が現れる。

男 (婦人警官に駆け寄り) ちょっと、ちょっとミニスカ・ポリスの婦警さん、その格好はともかく、点数稼ぎの駐禁取り締まりより、ああいう危ない男を取り締まって下さいよ！

婦警 なんですって！

男 あ、いえ、駐禁取り締まりご苦労さまです。なんたって、日本の道路は狭いですからね。ビシビシ、レッカー移動して下さい。はい。

婦警、敬礼してニコツと笑う。

男 それはそれとして、今はあの危険な男をどうにか――

ハンドル男の方を見ると、ゆっくり楽しそうに走っている。

婦警 あの人が、どうかしました？

男 いや、今、ものすごいスピードで……

婦警 私に取り締まるのは車です。あれは、いえ、あの人は、人間ですよ。

男 はい。

婦警 たとえどれほどのスピードを出していようとも、人間は取り締まれません。

ハンドル男、バックしながら向きを変え、ブツブツと去ってしまう。

婦警、男を不審そうな目で見る。

婦警 ……それより、あなたはここで何してるんですか？

男 私ですか？ 私は別に……何もやましいことはしてません。

婦警 (怒って) それじゃ、そんなことでいちいち声かけないで下さい！ 今月は点数低いんで、もう少しがんばらないと――あ、(ニコツとして) いえ。それじゃ。

婦警、男に敬礼をして去るが、去りながらもキョロキョロ辺りに目を光らせている。

男 ああいうのにひっかかると、許してくれないんだよなあ……

音楽。

女優とマネージャーがタクシーを捕まえようとやってくる。

男はしばらく様子を見ている。

女優 ……横山「マネージャーの名前」、いったいいつまで歩かせる気なの？

マネージャー すみません、もう少し行けばタクシー捕まると思っただけ……

女優 ねえ、今日のあの新人の子、なんていったかしら？

マネージャー 白鳥小百合ですか。

女優 ひど過ぎるわよ、あの子。あたし、あんな子と親子役なんてイヤ。なんとかしてちようだい！

マネージャー (困って) そういわれても……

女優 何いってんのよ、あたしは、女優よ。あなたは、マネージャー。あたしが直接いえないことを代わりにしてくれるのがあなたの仕事でしょ。あなた、マネージャーっていう仕事わかってないの？

マネージャー いや、わかってますけど……あ、タクシー見て来ます (逃げようとする)。

女優 ちょっと待ちなさいよ、横山！ いい、ということは、あなた、あたしの気持ちがわかってないと出来ないってことなのよ！

マネージャー それはもう……

女優 (早口で) あたしの気持ちはあたしの気持ちだけど、あなたの気持ちはあたしの気持ちでなくてはならないの！ それに、あなたの考えはあたし知らないけど、あたしの考えはあなたは知ってなくてはいけないし、あなたの考えでなくてもならないのよ！ わかる？

マネージャー (オロオロしながら) あ、あなたの気持ちがあたしの気持ちで、いや、あたしの気持ちはあなたの気持ちで、え、いや、あたしの考えはあなたの考えで、ええと……

マネージャーが困っているところに、男が近づいてきて女優に声をかける。

男 (ニコニコしながら) あのう、女優の大河原蓮子さんですよ？ 二時間ドラマとかによく出ている。

男が近づいてくるので、女優は迷惑そうに避ける。

マネージャー (男を遮り) あ、すみません、これからスタジオ入りなんで急いでるんです。またの機会にということでは……

男 また？

マネージャー はい、すみませんね。

男 またって、いつ？

マネージャー え、だから……今度会った時ですよ。

男 会えるかなあ、また。

女優 横山、何やってるのよ、早く捕まえてよタクシー。

マネージャー あ、はい、ただいま(行こうとする)。

男 (女優に近づいて、ジロジロ見ながら) しかし、テレビで観るのと、なんか随分イメージ違うなあ……

女優 横山、ちよつと……

マネージャー (あわてて戻ってきて) はい、なんでしよう大河原さん。

女優 (マネージャーに耳打ち) あたしが今、どういう気持ちかわかる？

マネージャー え……あ、はい。

マネージャー、男に近づく。

男 ……な、なんだよ！

マネージャー (急にニコニコして) いつも観ていただいてありがとうございます！ 此

れからも大河原蓮子、よろしく願います！

女優 (怒って) 横山！

マネージャー はい！

女優 違うわよ！ あたし、そんなこと全然、思っていないわよ！ こんなやつ、早く追っ

払ってほしいって思ったのよ！ もう、あんた、クビよ、クビ！ あたし、ひとりで

行くわ！

女優は、怒ってひとりで行ってしまふ。

マネージャー あ、大河原さん！

男 (マネージャーに) もうやめた方がいいよ、あんなやつマネージャーなんか。だ

いたい、女優である前に、女であるべきなんだよ！ それをあんな、男を男とも思わ

ない扱いして……あんただって、男として恥ずかしいと思わないの、そんな——

マネージャー (急に態度が変わり) これもね、仕事なんだよ！ 家には、女房と三人の

子供がいるんだ。男だから、なんでも出来るんだよ！（また、態度が変わり）すみません、待って下さいよ、大河原さん！

ひとり残った男、マネージャーを見送り、納得したように下を向く。

#21

色っぽい音楽。

女のモデルとそれを撮影しているカメラマンが現れる。

カメラマン いいよ、いいよ、そうそう、よし、そこで一回転してみようか。

カメラマンは、休むことなくモデルに声をかけている。

男は、近くに行き、声をかける。

男 撮影ですか？

カメラマン 見ればわかるでしょ。はい、あづさちゃん、目線こっちな……

男 あの、これって雑誌か何かに載るんですか？

カメラマン そうそう、しかも新しい雑誌。

モデル（男に）買って下さいね！

男 え、ああ。あの、もしかして、ヘア・ヌードとかも載るんですか？

カメラマン ヘア・ヌード？ もうバンバンよ！

男 え、バンバンですか！

カメラマン よし、じゃあ、ちょっと大胆ポーズいってみようか。

モデル はあ〜い。

モデル、スカートをチラッとめくり、足を組み直す。

男はそれを覗き込み、「うわっ！」と声を上げて、急に股間を押さえる。

カメラマンは撮影を続けている。

男 あの、新しい雑誌って、どついう？

カメラマン 素人熟女専門のヘア・ヌード雑誌なんですよ。

男 し、素人熟女、いいですねえ。

カメラマン そうだ。おじさん、ちょっと絡んでみない？

男 えっ、絡んでいいんですか？

カメラマン (モデルと男に指示し) はい、あづさちゃん、そこ行って…… (男に) あな

たは、そこで手を絡めて……そうそう、いいよ、いいよ。

男とモデル、絡んでポーズをとる。

男 ……あ、あの、これ、載るんですか？

モデル そうよ。おじさん、一躍スターよ。

男 (一瞬喜び) スター！ あ、でも、ダメなんです。載るんだったら、顔は目線入れて下さいね。こういうのやってるのバシると、まずいんで。

モデル あら、誰に？

男 あ、いえ、別に……

カメラマン さ、あづさちゃん、今度はスッポンポンでいってみようか！

モデル はーい、わかりました。

男 スッ、スッポンポンですか！ ということは……へ、へア、へア……

カメラマン 向こうによさそうな場所あったから、そこで。

モデル はーい。

男 向こう行っちゃうんですか？ あ、あの、私は？

カメラマン 悪いけど、やっぱり、目線とか入れたくないんでね。

モデル 残念ね、おじさん。雑誌が出たら、買ってちょうだいね。

カメラマンとモデル、去る。

男 (悔しがり) あ、あゝあ……ちくしょう！

2 2

そこに、ひとりのスーツ姿の青年が現れ、男に声をかける。

青年は、手帳のようなものを持っている。

青年 ちょっと、いいですかあ？

男 ちょっと？

青年 あ、はい。

男 何？

青年 あの、映画とかよく見ます？

男 映画ねえ、昔はよく見たんだけどね、最近はビデオばかりだな。

青年 やっぱり映画は、映画館で見た方がいいですよねえ。

男 何これ、アンケート？

青年 はい。このアンケートに答えてくれれば、毎月二回映画館と、試写会に一回、無料で行ける友の会の会員になれるんです。

男 ホモの会？

青年 あ、いえ、ホモじゃなくて友、友の会。

男 へえ、そりゃ、すごいね……で、いくら？

青年 いえ、ですから、無料で行けるんです。

男 でも、会員になるのに入金金いるんだろ？ アンケートに答えた後、会員証作りま
すっていったって、金取るんだろ？

青年 ………

男 だから、いくらなの、会員になるの？

青年 あ、でも、安いですよ。普通、映画一本見るのに千八百円ですよ。それが二本
見れて、しかも新着映画の試写会も行けるんです。それで二千円ですよ。

男 まあ、二千円ぐらいなら、つい払っちゃう人も多いだろうねえ。

青年 安いでしょ。

男 悪いけど、私、今お金持っていないんだ。それに、ほんとにその会員証で映画館入れ
るっていう保証もないわけだし、その連絡先だって、実際にあるのかどうか……だい
たい、二千円だけで毎月見れるなんておかしいよ。まともに考えたら……

青年、男の顔を睨みつけるようにして、足早に去ってゆく。

男 あ……アンケートだけでも答えたかったなあ……

23

音楽。

今にもパンツが見えそうな短いスカートにルーズソックスという女子高生が二
人、ペチャクチャおしゃべりしながらやってくる。

男はその様子を遠くから見ている。

女子高生1 いいじゃん、ユッチも入んなよお。全然、やばいことないからあ。

女子高生2 でっもお、かったるそうじゃん。

女子高生1 いいんだよ、かったるくしてたつてえ。てゆうか、何してようと、一時間た
だ一緒に歩いてお茶飲んだりするだけでえ、一万円だよ、一万円。それにうまくやっ
たら、いろいろ買ってくれちゃったりするんだからあ。あたしなんかあ、この前、シ
ヤネルのバッグ、欲しいなあつていたら、すぐ買ってくれちゃったんだから。

女子高生2 マジ？ いいなあ！

女子高生1 ねえ、やろうよ、ユッチも。あたしんとこ、店長もチョーやさしいしい。休
みかかったら、すぐ休ませてくれるしさあ。

女子高生2 うくん、やっちゃおうかなあ……

突然、男が、女子高生たちが履いているルーズソックスを、さらに上上げる。

女子高生たち、「キャッ！」と行って、飛びのく。

女子高生1 何すんのよ！

男 いや、靴下がずり落ちそうになってたから、上げてやったんだ。もしかして、伸び
きっちゃった靴下なのかもしれないと思っただけどね。

女子高生2 これはね、こういうソックスなの！

女子高生1 チョージラレナイシン！

男 何？ それ、日本語？ まあ、いいや。それよりさ、一時間ただ一緒に歩いてお茶
飲んだりするだけで一万円、ていうのいいねえ。私にも紹介してもらえないかなあ。

女子高生2 チョベリバ！ 行こう！

女子高生たち、呆れて、走り去る。

男 (走り去る女子高生たちに向かって) そんなパンツ見えてもいいようなスカート履
くんだった ら、階段で尻隠すなよな！

#24

音楽。

辺りの雰囲気が変わり、真っ白な服で羽があり、頭の上に輪が浮かんでいる天使が現れる。男は一瞬驚くが、天使と見合っているうちに楽しい気分になり、二人で戯れ出す。

天使 ハハハハ、(男を叩き) お前だ、お前だ！
男 イテテテ……
天使 お前、なかなか見所あるよ。偉いよ。
男 ……あのう、誰、あなた？
天使 ピエール。
男 ピエール？
天使 天使のピエールだよ。
男 (驚いて) 天使って、あの、空の上にいる？
天使 そうだよ。
男 (よく見て) それにしちゃ、ずいぶんかわいくない天使だな。
天使 (態度が変わって男に迫り) いいんだよ、そんなことは。
男 あ、いやいや……で、その天使が私になんの用？
天使 (また変わって) あ、だから、そう、お前なことなんだよ。空の上からこう(望遠鏡を覗く仕草) 見てたんだよ、お前のことを。
男 え、見てたって、何を？
天使 行いだよ、日頃の行い！
男 行い？
天使 ああ。なかなか偉いよ。頑張ってるよ。
男 そんな、頑張ってるんかいなし、偉くもないよ。
天使 ほおら、その謙遜するところがまた、いいねえ。
男 おだてるなよ。
天使 お前みたいな奴には、きっと幸せが訪れるよ。
男 ……幸せ？
天使 うん。だから、これからもその調子で頑張れよ。じゃ、僕は帰るから。
男 あ、ああ。
天使 じゃ！
男 じゃあ。

天使、男に手を振り、去って行こうとするが、立ち止まり、男のことをよく見る。

そして、ゆっくり男に近づいてくる。

男は「なにになに……」といいながら逃げようとするが、天使に捕まる。

天使（男の腹を触り）これだ……

男 え。

天使、サツと退き、「じゃじゃじゃ、じゃー」といって、去ってゆく。

男（天使に手を振り）じゃじゃじゃ……（天使が去った後、自分の腹を見て触り）これか……これだね、うん（ニコツとする）。

#25

辺りの様子が一変し、暗くなって風が吹き始める。

道の端に、首が曲がった白いＴシャツ姿の男が現れ、男に声をかける。

声をかける男 ……あ、あのう、すみません。寝違えて首が曲がっちゃった上に、服が引っ掛かって動けなくなっちゃったんですけど、ちょっと引っ張っていただけませんか？
しょうか？

男 あ、いいですよ。

男は声をかけた男に近づき、「せえの！」と身体を引っ張ってやる。
次の瞬間、声をかけた男は、男に絡みつくように飛び出してくる。

声をかけた男 引っ掛かったなあ！

男 誰だ、お前は！

声をかけた男は笑いながら、「デビル！」と叫んで白いＴシャツを手で引き千切る。
その下から現れるのは、紛れもなく、悪魔の姿である。

男（驚いて）あ、悪魔か！

悪魔 ハハハハ、お前が呼んだんだ！

男 いや、私は呼んでなんかないぞ。

悪魔 いや、覚えがあるはずだ。今までの人生を振り返ってみろ。例えば、明日、学校行きたくないからズル休みしちゃおうかなとか、明日の運動会、走るの苦手だから雨降ればいいなとか、近いところでは、飲み屋で飲んだビールの本数間違ってるけど、少なくなってるからいいやとか、今日は本当は稽古なんだけど、デートの方が大切だから休んじやおうとか……

男は、悪魔にいろいろいわれる度に、「うんうん」とか「あったよ、それ」などと反応をする。

悪魔 ハハハハ、覚えがあるだろ。そういった、人間の心の中のダークサイドが、私をここに呼び寄せたんだ！

男 ………

悪魔 どうした、怒（いか）っているのか？ そうだ、もっと怒れ！ 反省なんかするなよ！ もっと怒れ怒れ、ほら！

男は次第に悪魔に操られて怒り出し、唸り声のようなものを上げ始める。

悪魔 本来、人間というものは獣だった。それが、今はなんだ！ 牙をみがれ、爪を折られ、飼い馴らされた家畜のようになってしまった。ああ、嘆かわしい！ そうだ、こんな平和ボケした世の中なんかぶち壊してしまえ！

男 そうだ、ぶち壊せ！

悪魔 破壊こそ建設なりだ！

男 破壊こそ建設なり！

悪魔 今こそ本能を呼び覚まし、獣として蘇るのだ！

男 （雄叫びのように）おお！

悪魔 どうだ、俺と一緒に来ないか？ 俺と手を組まないか？

男 うううう！

悪魔 G O T O H E L L !

男 …… G O T O H E L L ! ……

悪魔 そうだ、G O T O H E L L !

男 G O T O H E L L !

悪魔は、「G O T O H E L L !」といいつつ、不気味に笑いながら消えてゆく。

男も目付きが変わって、「G O T O H E L L ! !」と繰り返している。

2 6

獣のようになった男の前に、色っぽい女が現れる。

女はカタコトの日本語で男に話しかける。

外国「スペイン」の女である。

外国の女 オニイサン、アソブカ？

男 遊ぶ？ 何して？

外国の女 アレ、イクカ？

男 行く？ そうか、G O T O H E L L ! !

外国の女 ホテル？ オーケイ。(男と手を組み) サンマンエン、イイ？

男 三万円？

外国の女 ダメ？ ジャア、ニマンエン。

男 ……それって、なんのお金？

外国の女 ……

男 (良心が目覚め) ああ！ あなた、もしかして……ダメだよ、そういうのは。

外国の女 ……アンタ、ケイサツカ？

男 いや、警察じゃないけど……

外国の女 ワカラナイ、ワタシ、ニホンゴ、ワカラナイ…… (逃げようとする)

男 知らないって、そんなに話してるじゃない。

外国の女 ノー、ユルシテクダサイ。

男 だから、私は警察じゃないし、別にあなたを責めてるわけじゃなくて……どこから

来たの？

外国の女 ……スペイン。

男 おお、情熱の国ねえ！

女は逃げようとする。

男は女の手をつかむ。

男 あ、ちょっと待って……

外国の女 ハナシテクダサイ！ ワタシ、ワルイコトシテナイヨ。

男 しかし、現にお金取って……（手を離す）

外国の女 ……ワタシ、ニッポンノオトコノヒト、タノシマセル。ミンナ、ガイジン、ガイジンテヨロコブヨ。ソレデ、オカネモラウ、ワルイカ？ スペイン、セイカツタイヘン。ワタシ、ニッポン、カネカセグ、スペイン、カネオクル。

男 うーん、あなたのいうことわかるけど、それ、違法ね。

外国の女 イホウ？ ワタシ、イホウジン。

男 そう。おもしろいね、あなた。

外国の女 アリガトサン。ジャネ。

女は、サッと逃げてしまう。

男 あっ……彼女だけが悪いわけじゃないんだけどな……

#27

音楽。

地質調査をしている教授と助手「女性」がやってくる。

二人は地面を調べている。

興味深げに見ている男。

助手 ……教授、この辺りは保存状態が比較的良さそうですね。

教授 そうだな。バージェス頁岩ほどではないが、地層構造がよく似ているからな。

男 （助手に近づき）あのおう、遺跡か何かの発掘ですか？

助手 いえ、遺跡じゃありません。化石です。古代生物の化石を調べているんです。

教授 河井くん、ちょっと。

助手 はい。

教授は助手に指示し、地面のある場所から何かの化石を掘り出す。

助手 ……（化石を見て驚き）教授、これは……

教授 いや……まさか……

男 どうしたんです？

教授 こんな場所から……有り得ないよ。

助手 しかし、これはどう見ても……

男 何を見つけたんですか？

教授 化石だよ。ピカイアの。

男 ピカイア？

助手 これまで、カナダのロッキー山脈の、標高二千メートル以上の場所では発見されてないものなんです。

男 ……それって、なんなんですか？

教授 カンブリア紀の古代生物、海の中に棲んでいた。

男 あ、あの、カンブリア紀って？ それに、ちょっと待って下さい、今、海の中に棲んでたっていいですけど、その前に、カナダのロッキー山脈の標高二千メートル以上の場所では発見されてないっていいましたよね？ ということなんですか？

教授は助手の方を見る。

助手は、教授に代わって説明を始める。

助手 カンブリア紀というのは、今から五億三千万年前の時代のことです。

男 ご、五億三千万年前……

助手 その時代の生物でよく知られているのは、三葉虫です。ご存じでしょ？

男 え、ああ、あの便所虫を平べったくしたような……

助手 （笑って）その頃の地球というのは、今の標高二千五百メートルぐらいのところまで、海に覆われていたんです。その海がなくなった時に、高いところは酸素濃度が低いで、生物の死骸を腐敗させるバクテリアが少なく、保存状態がいいまま、多くの化石が残っているんです。

教授 いわば、過去の一瞬をそのまま閉じ込めた、タイム・カプセルだな。

男 タイム・カプセルか……

助手 本来ならそういうところでは発見されない化石らしいものが、ここにあったんで、驚いているんです。

男 その、ピカイアっていうのも、やっぱり、三葉虫のような形をしてるんですか？

教授 （男に化石を見せ）現生動物だったら、ナメクジウオというのに似ているんだが。

男 ナメクジウオですか？

教授 まあ、ナメクジのようなものだ。体長も五センチぐらいだし……しかし、これは、人類にとって非常に重要な役割を果たしている生物なんだ。

男 ピカイアがですか？

教授 君、脊椎というのはわかるね？

男 セキツイ？ ハウス？ いや、すみません。わかりますよ、脊椎、背骨のことですよね。

教授 脊椎動物である私たちの、最古の祖先が、このピカイアなんだ。この世に初めて誕生した脊索動物であるピカイアの脊索が脊椎に進化し、魚になった。さらに、ヒレの骨が強化されて足を作り、陸上に進出し、哺乳類となっていったんだ。私たち人間も、この進化の延長線上にいるわけだから、ピカイアがこの世界に誕生し、カンブリア紀の海の中で生き残らなかつたら、魚どころか、我々人間も存在しなかつたことになる。

男 すごいんですね、ピカイアって。

教授 すごいというより、感謝すべきだな、ピカイアに。

男 (化石に向かって) ありがとう、ピカイア……あ！

教授 どうした？

男 ピカイアの化石が……消えてゆく……

教授 何！

教授と助手はあわてて男から化石を取り戻して見るが、それは、ただの石に変わってゆく。

教授 なぜだ……

助手 やはり、ピカイアの化石がこんなところにあるはずは……

教授 しかし、君も見ただろう、はっきりと！

助手 ………

男 ………いいじゃないですか、幻でも………だいたい、ここであなたたちに会ったことさえ、もしかすると幻なのかもしれない。しかし、私は覚えてますよ、あなたたちが教えてくれたことを……

教授 ………君は、誰かね？

男 え、私ですか？ ……ただの通りすがりの、ピカイアですよ。

教授、ニッコリして男の手を取り、握手をする。

そして、「行く」と助手を促して去ってゆく。

助手、男に軽く会釈をし、教授の後を追ってゆく。

男 ……結局、今という時間以外は、過去も未来も、みんな幻なんだよな。

音楽。
ひどく落ち込んだ様子の若者が現れる。

男 (若者を見て) お、悩める若者来り、か……

若者は、ため息をついたかと思うと、ヨロヨロと倒れそうになる。

男 (若者に駆け寄って抱え) 君、大丈夫か？

若者 あ、すみません。大丈夫です……(はっとして、男から離れる)

男 どうしたの？

若者 あ、いえ、別に。

男 なんだ、なんか悩み事があるんだな。こんな私でよかったら話してごらん。何かの手助け、いや、気晴らしぐらいにはなるかもしれないよ。

若者 でも、全然、見ず知らずの人に……

男 見ず知らずだからこそ、気兼ねなく話せるんじゃないか。さ、どうしたんだい？

若者 実は僕……エイズかもしれないんです。

男 ……エイズ？

若者 はい。

男 ……そう。で、病院に調べに行ったの？

若者 ……

男 行っていないんだね？

若者 (うなづく)

男 でも、調べてみなきゃ、ほんとにエイズかどうかわからないじゃないか。

若者 そうなんですけど……怖くて……

男 怖いのはわかるけど、エイズだって、感染してても発病しない人だっているんだ。

でも、発病しない人でも、感染させてしまうことはある。自分がエイズだということを知らないまま、人に染つし、それでもしその人が発病したら、どうするんだ？

若者 ……僕、もうすぐ結婚するんです。

男 それなら、なおさらじゃないか。

若者 でも、もし僕がエイズだって知ったら、彼女……

男 もし、その人が本当に君のことを愛してくれているのなら、そんな君を置いて逃げ出したりすることはないさ。エイズにかかってたって、普通の生活は出来るんだ。

それぐらい、みんなわかってきているはずだよ。

若者 ……………

男 思い切って彼女に打ち明け、一緒に病院に行ってもらうのもいいんじゃないか。

若者 それだったら、ひとりで。

男 ……もしエイズじゃなかったら、そのまま、彼女には黙っているつもりだね。

若者 (うなづく)

男 ……そうだね。世の中には、知らないままでいた方がいいっていうこともあるし、それは君の判断に任せるとして、とにかく、悩んでいたって何も解決しやしないんだ。前向きな結果を出せるような努力だけは、した方がいい。

若者 ……はい。ありがとうございます。行ってみます、病院。(男に軽く会釈して去る)

若者を見送る男。

男 ……忘れちゃいけないんだよな……

#29

そこに、演歌が聞こえてきて、派手な和服姿でラジカセとノボリと紙袋を持ち、タスキをかけた、和服姿の女の演歌歌手が現れる。

ノボリとタスキには、『秋雨情話／愛野美佳』と書かれている。

演歌歌手は、演歌の前奏に合わせ、マイクを手にして自ら口上を始める。

演歌歌手 ご当地出身、演歌の星、みなさまの「愛野美佳」が帰って参りました。お聞きいただきまずは、この秋話題の新曲『秋雨情話』でございます。ご当地のみなさまのために、命の限り歌います。

歌い出す演歌歌手。

だが、どこかに無理があるような感じである。

男は演歌歌手に近づき、応援をしたり、顔や着物をジロジロ見たり、ノボリやラジカセを触ったりする。

演歌歌手は不審そうな顔をしながらも、一生懸命歌い続ける。

男は、曲のボリュームを上げようとして間違えてラジカセのストップのボタンを押してしまい、歌が止む。

男は、「あ、すみません」といいながら、他のボタンをいろいろ押し、テープが飛び出してしまう。

それを見ていた演歌歌手は、さすがに呆れ、「ああ、もう結構ですから」と男に近づき、男を突き飛ばしてラジカセを片付け、その場から立ち去ろうとする。

男 あ、もう行っちゃうんですか？

演歌歌手 だって、誰もいないんじゃない……

男 いるじゃないですか、私が。

演歌歌手 ……CD、買ってくれます？

男 (財布を探るようにしながら) いくらです？

演歌歌手 (ニッコリして) 税込みで千円、今ならサイン入れますよ。

男 (気がつき) あ、金持ってたかったんだ。

演歌歌手 ……

男 お金の代わりに私が唄、歌いますから。CD下さいよ、サイン入りの。

演歌歌手 は？

男 こう見えても、私、唄得意なんですよ。『上を向いて歩こう』を歌い出す

演歌歌手 ……やめて下さい！

男 え。

演歌歌手 ……それ、好きなんです。

男 ……じゃあ、一緒に歌いましょうよ、ね。(再び、歌い出す) ……ほら、一緒に！

演歌歌手も一緒に『上を向いて歩こう』を歌い出す。

男 (途中から歌うのをやめて拍手しながら) いいよ、いいよ。好きな唄歌ってる時は、生き生きしてるなあ……

何かに気づいたように、突然、歌うのをやめる演歌歌手。

男 どうしたんです？

演歌歌手 (男の手をとり) ありがとうございます！ 今、やっと決心ができました。

男 え。

そういうと、演歌歌手はノボリや紙袋、ラジカセを片付け、男に会釈をして元気に去ってゆく。

男は、うれしそうに見送る。

男 楽しみにしてるよ！

#30

そこに、昔話から抜け出たような桃太郎が、ふて腐れた感じで歩いてくる。

男 おつ、今度は男の演歌歌手か……（よく見て）いや、違うな。あれは……桃太郎じゃないか！（駆け寄り）君、桃太郎だよな？

桃太郎 そうだよ。僕は、桃から生まれた桃太郎。ひとつつ、人世の生き血をすすり、ふたつ、不埒な——違うよ！僕は、本物の桃太郎だい！

男 わかったよ。これから鬼ヶ島に鬼退治に行くんだろ。

桃太郎 そうなただけだね。

男 なんだ、元気ないな。

桃太郎 あんまり気が進まないんだ。

男 気が進まないって、桃太郎がそんなことでどうするんだ！

桃太郎 僕って、プレッシャーに弱いタイプなんだ。

男 プレッシャーって……大丈夫、君なら鬼なんか簡単にやつつけられるさ。それに、お供の家来だっているんだろ。

桃太郎 お供なんていないよ。

男 あ、そうか。まだ会ってないんだな。君、きびだんご、持ってるだろ、おばあさんが作ってくれた。

桃太郎 持ってるよ。でも、これ、パサパサしてまずいんだ。あ、おじさんに全部あげるよ。

男 いらないよ。そのきびだんごをね、これから、くださいなっていう人たち、いや、人じゃないや、えくと、犬に猿にキジか。そういうのが来るから、家来にして、お供にするんだ。それでみんな協力して、鬼をやっつけるんだ。

桃太郎 きびだんごぐらいで、家来になるの？

男 なるの。

桃太郎 こんなまずい、パサパサしたきびだんごで？

男 なるの！

桃太郎 でも、犬と猿って、犬猿の仲っていつて、仲悪いんじゃないの？

男 そうかもしれないけど、とにかく、そういう話になってるんだから、大丈夫なの。
桃太郎 フウ〜ン、まあ、いいや。ここはひとつ、おじさんを信用して、と。

男 なんでもいいから、早く行きなさい。

桃太郎 わかったよ。それにしてもおじさん、すごい汗だね。このタオル使っているから汗拭きなよ。冷やしといたから、気持ちいいよ。

男 ありがとう、気が利いてるね。

男、桃太郎から手渡されたタオルで気持ちよさそうに顔の汗を拭く。

桃太郎 おじさんはノーメイクだから、いいね、汗拭けて。

男 は？ あ、これ、ありがとう。(タオルを返す)

桃太郎 さて、と。じゃあ、気を取り直して、鬼退治に行くとするか！

桃太郎、腕を大きく振り振り、〈桃太郎さんの歌〉を歌いながら元気になってゆく。

男 ……(気づいて)なんで、その歌知ってるんだよ！

#31

そこに、セーラームーン／セーラースターズのコスプレをした男が現れる。
コスプレ男は、分厚い本(コミケのカタログ)を持っている。

男 (気がついて)お、なんだ、今度は？ わかった！ セーラームーンだな。

コスプレ男 (男に)あのお、西地区はこっちでいいんでしょうか？

男 ニシチク？

コスプレ男 コスプレ・コンテストの会場ですよ。

男 え、何コンテストだって？

コスプレ男 コスプレ！ コスチューム・プレイの略ですよ。

男 それって、なんか、エッチなやつ？

コスプレ男 違います！ 僕たちは純粋な気持ちでコスプレを楽しんでるんです！

男 ま、いいけど、セーラームーンであることに変わりはないよな？

コスプレ男 セーラームーンじゃないですよ！ セーラースターズです！ ほら、ここが

違うでしょ。ここも。ここだって違うんです！ よく見て下さいよ！

男 (呆れて) よく見たってわかんねえよ！

コスプレ男 おじさんねえ、そんなことばかりいっていると、「月に代わって、おしおきよー」

男 おしおき？

コスプレ男、ポーズをして、ニコニコしながら去ってゆく。

男 やっぱり、セ(S)の字を書き(ーラーム(M)の字を書き(ーンで、SMなのか……

3 2

ヒュードドドドという音がして、辺りの雰囲気が変わる。

そこに、白装束で頭に三角布をつけた女の幽霊が現れる。

男 お、また、コスプレだな……(女に近づき)なかなか雰囲気は出てるけど、これ、なんのコスプレ？ 幽霊っていうのはわかるけど……なんだろうなあ……

幽霊 恨めしや！

男 お、定番のセリフが出ましたね！

幽霊 この恨み、はらさでおくべきか！

男 いいね、いいね。

幽霊が男の前を通る。

男 (ブルツと震え) なんだよ、なんかすごい冷気を感じたぞ、今。

幽霊、男の方を見て、何もいわずに去ろうとする。

男 お、おい、ちょっと待てよ！

男、幽霊を捕まえようとするが、なぜか捕まえられない(という仕草をする)。

幽霊、男の方を一度振り向き、サーツと去ってしまふ。

男 ……（震えながら）そ、そんな、まさか……

3 3

「ほら、もっとしつかり腰を入れるんだ！」などという声が出て、シャドー・ボクシングをしているボクサーと、トレーナーが現れる。

男は離れて見ている。

立ち止まり、シャドー・ボクシングを続けるボクサーと、指示を続けるトレーナー。

そこに、少女があわてた様子でやって来て、ボクサーに声をかける。

少女 修平さん！

ボクサー （シャドー・ボクシングを止め）なつきちゃん……

少女 まだ続けているの。これ以上やったら――

トレーナー なつき、余計な口を挟むんじゃない！

少女 ……お父さん、わかってるでしょ。お願いだから、もう、あたしから修平さん取らないで！

トレーナー なつき……

少女 今までとは事情が違うの！ 確かに今までは、あたしだって修平さんにチャンピオンになってもらいたって、一生懸命応援してたわ。でも、もしも一度、目に強いパンチを受けたら、修平さんの目は見えなくなっちゃうのよ！

話を聞いていた男も驚く。

ボクサー ……なつきちゃん、これは俺が選んだことなんだ。

少女 修平さん……

ボクサー このままじゃ、俺は負け犬のまま終わってしまう。トレーナーやなつきちゃんの期待を裏切ることになる……

少女 もういいのよ。

ボクサー よくないんだ！ 今まで俺は、自分のために闘ってきた。君がいくら応援してくれても、結局闘うのは俺自身だし、だったら、自分のために頑張ればいいと思っていた。トレーナーが俺にいろいろコーチしてくれるのだから、トレーナーはトレーナー自身のためにやっていることなんだと割り切って、教わっていた。だけど、あの、

宮下に俺がノックアウトされて目をやられた試合の後、トレーナーが会長と話しているのを、偶然聞いてしまったんだ。会長は、俺の負けん気を利用して、宮下との再戦を計画していた。復讐戦ということで、客が入ると睨んでのことだ。だが、その時、トレーナーはこういったんだ。「新田には新田の人生があります。最終的に決断するのは新田自身かも知れませんが、いい方向に導いてやるのは、私たちの役目です。私は、やつが失明するかもしれない道を選んでやることは出来ません。私は、今度の試合はやらせたくありません」。

少女 お父さん……

ボクサー トレーナーが、こんなに俺のことを考えていてくれたなんて……なつきちゃん、君だって……

少女 ……そうよ。ずっとずっと、あなたのことを考えていたわ。それは、あなたのことを、ずっと好きだったからよ！

ボクサー ……だから俺は、今度の試合は、自分自身のためじゃなく、トレーナーやなつきちゃんのために闘いたいと思って、いや、闘わなくちゃいけないだと思って、決めたんだ！

少女 修平さん……

ボクサー なつきちゃん、俺はやるぜ。今までの俺とは違う……愛するもののために闘うことで、俺は、変わるような気がするんだ。いや、変わるんだ！ ……トレーナー、お願いします！

トレーナー ……よし！

ボクサー たとえ、目が見えなくなったとしても、俺は、もっと大切なものを手に入れられるかもしれない——

男 (思わず近づいて、話しかけ) ダメですよ、目が見えなくなったとしてもだなんて！ あ、いえ、すみません、部外者が……でも、たぶん、そういったことに気がついたってことは、ものがよく見えるようになったってことですから、相手のパンチだって、スイスイかわせますよ。当たりませんよ。

少女 そうよ。

トレーナー ……そうだ。

ボクサー (大きくうなづく)

男 (ボクサーに) 頑張ってください、なんて月並みなことはいけません。愛するものために、相手を倒しちゃって下さいよ！

ボクサー はい。

トレーナー 行くぞ。

トレーナー、ボクサーに指示を出し、ボクサーは、またシャドー・ボクシングを始めながら、二人で去ってゆく。
少女も、笑顔で男に軽く会釈をし、ボクサーとトレーナーを追いかけてゆく。

男 (ニコニコしながら) 愛するもののために闘う、か……いいよな……

#34

風。

コート姿でハンチングを被った刑事が、手錠をかけた犯人を連れてやってくる。手錠のところにはタオルがかけられている。

男は、険しい顔をして遠くから見ている。

刑事 ……いいか、村井、二度とこんなことするんじゃないぞ。田舎の御両親を、これ以上悲しませるようなことはするなよ。

犯人 うるせえな！ あんたに俺の気持ちがわかるかよ！

刑事 わかるぞ、村井、俺にはわかる。俺も青森から集団就職で出てきた人間だ。田舎もんの気持ちは、よくわかる。

犯人 けっ！

刑事 だけどな、村井。一度、都会に出て来た以上、そこで生きてく術を覚えていかなきゃいけないんだ。郷に入っては郷に従えだ。おめえみたいに反発ばかりしたら、受け入れてくれるもんも受け入れてくれなくなっちゃう。

男の前を通り過ぎると、犯人が男に「何見てんだよ！ 見せもんじゃねえんだよ！」と叫んで、飛び掛かっていく。

タオルが落ち、手錠が見える。

刑事が間に飛び込んで、犯人を引き離す。

刑事 (男に) すみません。大丈夫ですか？

男 あ、いえ、別に。

刑事、犯人の手錠にタオルを掛けてやる。

そして、再び連れて行くとする。

男 (二人を呼び止め) ああ……

刑事 (立ち止まり) はい。

男 人生一度きりっていいですけど、今は寿命が伸びてますからね。昔の人が五十歳で死んじゃったことを考えると、二倍の人生を送れるわけで……つまり、一度死んだつもりになれば、もう一度、違う人生を――

犯人 うるせえぞ、ジジイ!

刑事 村井!

犯人 ……そんな、ガタガタいわなくなつて、わかつてるよ……考えてみるよ、もう一度。刑事 ……そうか。

刑事、男に会釈をして、犯人を連れて去ってゆく。

男、二人を見送り、小さな声で「ガンバレ!」と声をかける。

#35

黒いビニール袋のゴミ袋を両手に持ったオバサンが、辺りをキョロキョロ見回しながら現れ、道の真ん中辺りにゴミ袋を置いて、さりげなく行こうとする。

男 ちょっと待ちなさいよ。

オバサン はあ?

男 はあじゃないよ。ダメだよ、こんなところにゴミ置いてっちゃ。それに黒いビニール袋は持つていってくれないよ。

オバサン うちの方はまだ大丈夫なの。

男 じゃあ、自分のところに持っていきなよ。

オバサン うちの近く、ノラ猫がいるのよ。だから、袋破られちゃうと、臭くて……

男 だから、朝、出すんですよ。

オバサン ほら、朝って何かと忙しいから。

男 御主人が仕事行く時、出してつてもらえばいいじゃない。

オバサン (キツとした顔になって) 主人とは離婚しました!

男 あ、すみません。

オバサン もう、失礼ね! (怒って去ろうとする)

男 (呼び止め) ちょ、ちょっと、それとゴミとは別の話でしょ! (ゴミ袋を指差し)

とにかく、これ持っていきなさいよ。

オバサンは、仕方なくゴミ袋を持って去ろうとするが、去り際に振り向く。

オバサン (男に向かって) まったく、自分勝手な人ね! (去る)

男 どっちが! ……しかし、ゴミが多過ぎるんだよな……

#36

そこに、男同士のカップルが腕を組んで現れる。

男は、なんとなく二人をやり過ぎすが、ひとりの男と目が合う。

その男Aは立ち止まる。

男 あ、仲良さそうで、いいですね。

男B (男Aに) 何見てるのよ、和哉。

男A (男に近づき) あの……

男 あ、私、そういうんじゃないですから……

男が去ろうとすると、男Aが追いかける。

男B 和哉、どうしたのよ!

男A あ、いや、別に。

男B 何よ、あんな男に色目使って。

男A 色目なんか使ってないよ。

男 (男Bに) あの、色目なんか使われてませんから、心配しないで下さい。

男B (男に) 向こう行ってよ!

男 あ、はい。もちろん、行きますよ、さいなら。

去ろうとする男を、男Aは「あ、ちょっと……」「と、さらに追っ。

男B 和哉!

男 (男Aに) あ、君、だから、僕はそういうんじゃないから!

男B (泣きそうになって) 和哉ったら、何よ! あたしのこと、お前が一番だっていっ

ておきながら……くやしい！

男A 泣くなよ、健太郎！ 違うんだよ。この人、なんだか家出した弟に似てたんで、ちよっと気になって。

男B 和哉の弟さん？

男A ああ。でも、やっぱり弟は弟さ。あんなんじゃない！

男B そうよね、和哉の弟さんて、もっとカッコイイよね。

男A ごめんな、健太郎。

男B ううん、いいの（腕を組む）。でも、和哉、お詫びにたっぷり愛してね。

男A ああ。朝まで寝かせないぞ！

男B うれしい！

二人、イチヤイチャしながら去る。

男 なんなんだよ、あんなんじゃないって！ ま、いろいろいるよな。

#37

音楽。

大きな荷物を抱えた行商のオバサンがやってくる。

男は気がつき、駆け寄る。

男 あ、オバサン、手伝いましょうか？

行商オバサン ええて、ええて。これがわしの仕事なんだから。さて、と、ちよっくら服すっかな。

行商のオバサン、腰を下ろし、荷物を降ろす。

男 何を売ってるんです？

行商オバサン 野菜だよ。採れたての新鮮な野菜さね。

男 無農薬ですか？

行商オバサン あたりめえだ。見た目は悪いけど、うめえぞお。

男 そうでしょうねえ。

行商オバサン どうだい、おめさんもひとつ。

男 欲しいけど、今、お金がないんですよ。
行商オバサン そうかい……そうだ、ちょっと痛んでて売れないやつなんだけど、別に悪くなってるわけじゃないから、よかったら……

行商のオバサン、降ろした荷物の中を探して、キュウリを取り出す。

行商オバサン そら、これ、やるべ。食ってみ。

男 わあ、キュウリだ！ (喜んで) いいんですかあ。

行商オバサン ああ。

男 ありがとうございます。私、キュウリに目がないんですよ。

男、行商のオバサンに貰ったキュウリを軽く拭き、バリバリと食べる。

男 うまい！

行商オバサン あたりめえだ、わしが作ったんだから。

男 私の友人でね、キュウリ嫌いで食べられないなんてやついるんですけど、こんなおいしいもん食べられないなんて、かわいそうですね。

行商オバサン キュウリに限らず、好き嫌いはいかんよね。それだけで、人生の楽しみ縮めてるようなもんだ。何しろ、人生は一度つきりなんだから。

男 ……なかなか悟ってますね。

行商オバサン ああ？

男 あ、いえいえ。

行商オバサン さて、商売、商売、と……(立ち上がり、荷物を背負いながら) 早いところ稼いで帰らなくては、暗くなっちまうぞ。人間は、お天道様が出るうちに一生懸命働いて、お天道様が沈んだら、寝るんだ。(男に) な。

男 そうですね。

行商のオバサン、去ってゆく。

男 ドッコイ、生きてるよなあ……

音楽。

バスガイドと教師が現れる。

バスガイド (後ろに向かつて) はーい、みなさん、遅れないで下さい。
教師 みんな、遅れるな！

生徒たち「男の子2・女の子3」が現れる。
小学校の修学旅行である。

男 (気がついて) お、小学生の修学旅行だな。

生徒たちが現れる。

生徒1 何いってんだか。みんなっていったって、ひとクラス5人しかないのよお。

教師 ああ、そうだったな。

バスガイド 少子化とはいえ、寂しくなりましたねえ。

教師 まったく。

バスガイド あたしどもが小学校の頃は、ひとクラス20人ぐらいで……

教師 私の頃には30人はいましたよ。それも5クラスありましたから。

生徒2 時代が違うんだよ、遠藤。

教師 お前、先生を呼び捨てにするとはなんだ！ 昔から、三尺下がって師の影を踏まず、

といてな——

生徒3 何度も聞きました！ 大昔の話でしょ！

教師 あ、そ、そうでした、そうでした。すみません。

生徒4 まったく、時代錯誤もはなはだしいぜ。遠藤よお、校長にいつて、クビにしても
らってもいいんだぜ！

教師 いや、それだけは勘弁してくれ。私にも生活というものが……

生徒5 まあ、許してやろうよ。遠藤ったら、ちゃあんと子供も作らずに頑張ってるんだ

からさあ。

生徒1 エライじゃん！

生徒2 公僕の鏡だぜ！

男 (考えて) どういう時代なんだ……

バスガイド それじゃ、ここでひと休みしまあす！

生徒3 ねえ、写真撮らない？

生徒5 撮ろう、撮ろう！

生徒4 ガイドさん、一緒に撮ろうぜ！

バスガイド はいはい。

教師 それじゃ、私が……（生徒3からカメラを受け取るうとする）

生徒2 だめだよ、遠藤も入れよ。

教師 しかし、それじゃ撮る人が……

男 あ、私が撮ってあげましょうか？

生徒3 すみません、お願いしまあす。

男、生徒3からカメラを受け取る。

男 じゃあ、そこに並んで。

生徒2 ほら、遠藤はここだよ。

生徒たち、教師を四つん這いにさせ、そこに何人が座る。

男 （怒って）何やってんだ、君たち！

教師 あ、いいんですよ。

生徒5 ほら、おじさん、早く撮らないと、こいつつづれちゃうよ！

男 わ、わかったよ。

男、写真を撮る。

その瞬間、教師はつぶれてしまう。

生徒たちに蹴られたり、口々に「何すんのよ！」「生徒にケガさせる気か！」「お

嫁に行けなくなったら、どうしてくれるの！」「などと、責められる教師。

生徒1 あゝあ、つまんない。みんな、向こう行こう！

生徒4 ガイドさんも一緒に行こうぜ！

バスガイド あ、はい。

教師を残して、みんな去る。

教師に駆け寄る男。

男 大丈夫ですか？

教師（立ち上がり）なあに、こんなこと、日常茶飯事ですから。

教師、ビッコをひきひき去ってゆく。

男 学級崩壊も、ついにここまで来たか……って、ホントかよ、おい……

39

音楽。

ウエディングドレス姿の女が走り込んで来る。

驚く男。

ウエディングドレスの女（男に）あ、あの、駅は、こちらの方でいいんでしょうか？

男 あ、ああ、確かに、この先にあると思いますけど……

ウエディングドレスの女 ありがとうございます。（行こうとする）

男 でも、あなた、そんな格好じゃ。

ウエディングドレスの女 すみません。式場から逃げて来たもんですから。

男 式場って……当然、結婚式ですよ？

ウエディングドレスの女 はい。

男 なんで、また？ あ、いや、別に、その……

ウエディングドレスの女 ……バカバカしくなっちゃって。

男 結婚が、ですか？

ウエディングドレスの女 ええ。

男 ああ、見合い結婚か何かで、親が無理矢理決めた結婚だとか……

ウエディングドレスの女 いいえ、恋愛結婚です。彼とはもう五年、いつか結婚するだろ

うなと思っただけ合っていました……

男 じゃあ、なぜ？

ウエディングドレスの女 だから、そういうこと。そう思っただけのこと、すべてがバ

カバカしくなっちゃって。

男 ……彼だって、あなたと結婚したいと思っただけだよ。

ウエディングドレスの女 はい……実はあしたたち、付き合いたしてすぐ……（押し黙る）

男 すぐ、何です？

ウエディングドレスの女 ちょっとしたことがあって……

男 (察して) あ、(お腹の前に手をやり) これですね。

ウエディングドレスの女 (うなづく)

男 いや、若い頃にはよくあることですよ。

ウエディングドレスの女 そうかもしれないですけど、それで、彼もいつか必ず結婚しようっていつてくれたんですけれど、なんか段々、それって、本当の愛情とかじゃなくて、あたしに対する責任感みたいなもので、そういうことをいってるんじゃないかって思うようになってきちゃって……

男 まあ、男はそういうところもあると思いますけどね。

ウエディングドレスの女 確かに、彼のその思いに応える形で結婚するのもいいかもしれませんが、あなたたち、まだまだ若いし、他の人を好きになるかもしれない……いえ、ならなきゃいけないと思うんです。それで、その時に「人を好きになる」っていうことがわかって、そこで改めて、やっぱり彼のが好きなんだってわかってからでもいいんじゃないかって思ったなら、なんか、お金かけて、もちろん親が出してくれてるんですけど、だからこそよけい、こんなことやることがバカバカしくなっちゃって……

男 ……偉いよ、あなた。決して流されていない。あなたのいうことは正しいと思う。でもね、逃げちゃダメだ。その思いを、彼にも、両親にも、キチンと話してごらん。あなたがそれだけの思いを持っていたら、必ず伝わるよ。

ウエディングドレスの女 ……そうでしょうか？

男 伝えなきゃいけないんだよ。わかってもらえるまで、頑張るんだ！ そんな格好で式場から逃げ出せる勇氣があるんだったら、出来るはずさ。

ウエディングドレスの女 ……わかりました。やってみます。

男 時間はかかるかもしれないけどね、ただひとつの方向に流されているよりは(矢印の方向を差し) ……マシなはずだよ。

ウエディングドレスの女、力強くうなづき、男に礼をして、来た方向にゆっくり戻ってゆく。

男 ……明日のために、今来た道に戻ってみることだってあるんだ。

40

矢印の向きの逆の方から、新興宗教の教祖と弟子たちが、不思議な踊りをしな

がらやってくる。

男は、彼らの風体だけでなく、逆からやって来たということに驚いている。
弟子たちは、男にチラシを配る。

男 ……（読んで）へ未来からの予言者・倉石教祖が語る『どんとこい！ ハルマゲド
ン』？

教祖 私は、ウソは申しませ〜ん！

男 ウソつかないなんていってることが、すでにウソついでることじゃないか！

弟子1 なんですって！

弟子2 教祖様になんです、その口のきき方は！

男 だいたい、あんたたち、そっちから（彼らが来た方を指さして）来ただろ。時代の
流れに逆行してるんだよ！

教祖 ハハハハ、逆行とおっしゃいましたが、その流れというものは誰が決めたのですか？

男 誰がって……それはひとつの大きな流れさ。常識ってものがあるんだ！

教祖 （微笑みながら首を左右に振り）我々は、世間一般の常識などというものには、一
切、縛られません。それ！

教祖の合図で、弟子たちは道から飛び出て行き、観客にチラシを配りながら去
ってゆく。

男は驚く。

教祖 ハハハハ……（矢印の逆の方に去ろうとする）

男 待てよ！

男は、教祖の顔を睨みつけ、矢印の向きを変えてしまう。

すると、教祖は一瞬驚くが再び笑い出し、向きを変え、堂々と、また矢印の逆
の方（やって来た方向）に向かって歩き出し、去ってゆく。

教祖が去った後、男はまた矢印の向きを変え、元に戻す。

男 （空しそうに）こんなこと繰り返してたんじゃ、いつまでたっても変わらないよな

……

風。

まるで、人生に疲れたかのように落胆した様子の男が、ロープを引きずりながらやってくる。

ロープの先には輪が出来ている。

男はロープを引きずる男の様子を遠くから見ている。

ロープを引きずる男は、しばらくすると、ロープをかけられる木がどこかにないかと辺りを見回す。

そして、その様子をジッと見ていた男と目が合う。

ロープを引きずる男は、ロープを隠して逃げようとする。

男が追いかけてきた時、辺りの様子が変わり、さわやかな音楽が流れてくる。

そして、まるで幻のように、ひとりの女がパントマイムをしながら現れる。

パントマイムの女は、その場が花園で、ポカポカした天気の中、きれいな蝶々や虫たちが戯れている、まさに楽園といった様子をパントマイムで演じてゆく。

男もそのパントマイムの中に入り、一緒に楽しみ出す。

やがて、その様子を見ていたロープを引きずっていた男も、パントマイムの真似をするようになる。

ロープを引きずっていた男の顔は、生きる希望が出て来たかのように明るくなる。

それを確認したパントマイムの女は、二人に手を振って去ってゆく。

ロープを引きずっていた男 (去ってゆくパントマイムの女に向かって) ありがとう！

パントマイムの女が去った後、ロープを引きずっていた男は、ロープを来た方向に投げ返し、男にお辞儀をして、希望に胸を膨らませたように歩いてゆく。

男 (うれしそうに) それでいいんだ……

4 2

男がまだ楽しそうにパントマイムの真似をしたりしていると、モーツァルトの〈アヴェ・ヴェルム・コルプス〉が流れてきて、牧師が現れる。

牧師 ……（男を見て）これこれ、どうしました。道の真ん中でそのようにはしゃいでいると、危ないですよ。

男 あ、牧師さん、すいません。なんか、ちょっと楽しい気分になったもんで。

牧師 それはよかったですね。昔から「笑う門には福来る」といいますからね。

男 ……あの、それってもしかして、中国の故事じゃないですか？

牧師 そうでしたか、ハハハハ。

男 あなたも私に劣らず明るい人ですね。

牧師 いいですか、「笑いのない人生は物憂い空白である」という言葉もあります。

男 それって、吉本のキャッチ・フレーズみたいですね。

牧師 サッカレーという、イギリスの写真主義の代表的な作家の言葉です。いずれにしても、あなたのように人生を楽しむということは、とてもよいことだと思いますよ。

男 楽しんでるばかりじゃないですけどね、ハハハハ。

牧師 「私たち哀れな人間は、善いことも悪いことも出来る。動物であると同時に神々なのだ」。これは、ヘルマン・ヘッセです。

男 動物であると同時に神、ですか？（牧師に）あなた、本当に神に仕える牧師さんですか？

牧師 ハハハ、そんなことはどうでもいいじゃないですか。ところで、あなたには、夢や理想、希望といったものはありますか？

男 希望ですか？ どうなんでしょうねえ……

牧師 旧約聖書には、こういう言葉があります。「すべて生けるものの列に入るものは望みあり」。つまり、生きているものであれば、誰もが望みを持つことが出来るということですよ。

男 そうですね。やっぱり、あなた――

牧師 もちろん、時には望みを失ってしまうことだってあるでしょう。そんな時は、ぜひ、いらっしやい、私のところへ。門は、いつでも開かれていますよ。

牧師、男に軽く会釈をして去る。

男 門はいつでも開かれている、か……確かに、救われる言葉だよな。

激しい音楽。

いきなり、拳銃を持ったチンピラ風の男が飛び込んでくる。

チンピラは、顔や身体に返り血を浴びている。

男 (驚いて) おい、どうしたんだ！

チンピラ (男に拳銃を向け) うるせえ、来るな！

男 お前、血だらけじゃないか！

チンピラ そんなことはわかってるんだよ！

男 ……何したんだ？

チンピラ 見りゃわかるだろ！ 人殺して来たんだよ、こいつで！

男 ……これから、どうするんだ？

チンピラ そんなこと、わかんねえよ！

男 そんな格好じゃ、どこにも逃げられないぞ。

チンピラ うるせえ！

男 ……自首しろ、な。自首すれば、今のうちならまだ——

チンピラ うるせえんだよ！ てめえの指図なんか受けねえよ！

男 いいか！ 門はな、いつでも開かれているんだ。

チンピラ ……(ゆっくりと拳銃を下げる)

男 (近づこうとする)

チンピラ だけ！

男 どくのは簡単だけどな——

チンピラ だけよお！

チンピラは、拳銃を数発発砲し、男はもんどり打って倒れる。

倒れた男にゆっくりと近づくとチンピラ。

チンピラ (男の様子を見て) ……おい……おい！ ちくしょう……(首を左右に振り)

だからいったじゃねえかよお！

チンピラ、走り去る。

男は、息絶えたまま倒れている。

そこに、ほろ酔いかげんのサラリーマンの男が、大きな声で上司の愚痴をブツブツいいながら通りかかる。
サラリーマンは、怒っている。
やがて、倒れている男を見つけ、少し近づき、指を差して大きな声で笑い出す。
そのうち、何を感じたのか、大きな声で泣き出す。
そして、泣きながら去ってゆく。

4 5

上品そうな買い物帰りの主婦が二人、子供の話題を話しながら通りかかる。

主婦 A ……ほんと、全然勉強しないんだから。この間のテストだって、もう散々。

主婦 B うちもよ。塾行ってたって、何の役にも立たないだから。もう、やめさせちゃおうかしら。

主婦 A そうしたいんだけど、ほとんどの子が行ってるでしょ。なんか行ってないと仲間はずれにされちゃうみたいよ。

主婦 B いやあねえ……（倒れている男に気づく）あら、酔っ払いよ。

主婦 A ほんとだわ。昼間っからいい気なもんねえ。

横を通り過ぎようとする。

主婦 B （不審に思って立ち止まり）ねえ、ちよつと変よ、この人。

主婦 A なあに？

主婦 B （近づいて）し、死んでるわよ！

主婦 A え？ まさか……

主婦 B ほ、本当よ。ど、どうしましょう！ け、警察に届けなきゃ……

主婦 A ちよつ、ちよつと落ち着いてよ、奥さん！ いい、・触らぬ神に祟りなし・って
いうでしょ。こんなことで、なんかご近所で噂されたり、子供の進学にだっ
てかかわ
ってきたりしたら困るじゃない。（周りを見て）行きましようよ。さ、早く。

主婦 B そ、そうね。

二人の主婦、あわてて走り去る。

4 6

そこに、汚い格好のホームレスの男が身体を掻き掻きやってくる。
何か落ちていないかと探しているが、やがて倒れている男に気づく。
近づいて倒れている男に声をかけるホームレスの男。

ホームレス あんた、故郷はどこだい？

当然、返事はない。

ホームレス そうか……よし、俺が連れてってやろう。

ホームレス、男を背負う。

ホームレス ……あんたはいいよな。もう、帰ること、考えなくてもいいんだから……

ホームレス、男を背負ったまま、去ってゆく。

4 7

遠くから、ラベルの「ポレロ」が聞こえてくる。
ひとりの男が現れる。

男は、矢印の看板の前を通り過ぎると、ふと考え事をするかのように立ち止まり、やがて看板の前に進み出ると、意を決したように矢印の指し示す向きを逆に変えてしまう。

矢印の向きを変えた男は満足したように微笑み、少し離れた横に腰を下ろす。
男は、足を抱えて座り込み、道の左右を見ている。

4 8

やがて、男が現れたのと逆の方向から、すなわち道の下手側から、喪服を着た人々「男2・女3」がゆっくりと現れる。

彼らは、#2で登場した喪服の人々と同じ人物である。

だが、今度は、悲しみではなく、何が楽しいのか、沸き起こってくる笑いをこらえながらも、どうしようもなく笑みがこぼれてしまうといった様子で、足取りも軽い感じで歩いてゆく。

座っている男の前も、何事もなく通り過ぎる。

人々がその道から去ろうとする頃に、男は何かに気づいたように立ち上がり、彼らを見送った後、勢いよく振り向き、彼らが来た方向を、恐ろしいような顔で見つめる。

音楽が盛り上がり、辺りはゆっくりと闇に包まれてゆく――

「了」